

## Cincinnati, Children's Hospital Medical Center

～シンシナティの留学生活から～

小野木 循\*

私は現在、オハイオ州シンシナティにある、シンシナティ・チルドレンズホスピタル・メディカルセンター (Cincinnati, Children's Hospital Medical Center; CHMC) に留学中です。私が所属するのは、Clinical Trials Office, Department of Clinical Pharmacology です。私の研究テーマは抗てんかん薬の治療薬物モニタリングにおける母集団解析をしており、皆様とは少し異なり、薬剤師として留学しています。現在留学中のシンシナティや病院についてのご紹介と、私の留学生活についてお話ししたいと思います。

オハイオ州シンシナティ市は五大湖の南、シカゴから車で南に5時間走ったところにあります。人口40万人弱の小さな街です。この街に何があるかといえば、7つの丘と、ゆったりと流れるオハイオ川。見所といえば、歴史ある動物園に、ダウンタウンが見下ろせるきれいな公園です。のどかな街ではありますが、シンシナティ市は比較的黑人の割合が高く、昨年4月以来、人種問題が深刻化しています。それは、白人警官が黒人に発砲した、というのが発端です。この関連の裁判があるたびにダウンタウンでは暴動がおき、警戒態勢が張られます。シンシナティはチリという食べ物がある街です。チリというと辛いものを想像しますが、昔にギリシャ人がアレンジしたとあって、まったく違った形となって流行し、ご当地ものになりました。それは、ひき肉を煮込んだスープに、シナモンや豆などを加えたものを、スパゲッティに細かく刻んだチーズと一緒にドーンとのせたシンプ

ルなものです。シンシナティ人はこれを愛して止みません。また、シンシナティを代表するマスコットは豚といえるでしょう。街のいたるところにかわいらしい Flying Pig の肖像が見られます。今は目にすることはありませんが、昔、このあたりでは養豚が盛んで、豚の脂肪を利用して石鹸を作ったことから、ここに洗剤メーカーのプロクター&ギャンブル社が設立され、いまだダウンタウンに本社を置いていて、その大きなツインタワーはシンシナティの夜景に欠かせません。

さて、病院の話ですが、この CHMC は全米でもトップの一つにあげられる大きな小児専門総合病院で、シンシナティ大学のキャンパスに隣接した広大な敷地に、300床ほどの病室をもちます。今年の9月には新しく病棟がオープンするので、さらに増床されます。病院に入ると、とてもかわいらしい内装に目を惹かれます。病室にも装飾が施され、また、これはアメリカでは標準なのでしょうが、病室のほとんどは個室で、バス・トイレつきです[写真1]。子供たちの病院食にはフライドポテトやハンバーガーが出てきます。これは、通常の生活から大きく変化しないような工夫からでしょう。残念ながら、栄養管理という概念が多くの保護者にはありません。麻薬を使っている親も少なくないので、子供達は小さいときから、いわゆる良い教育を受けているとは言えません。

子供の仕事は‘遊ぶこと’だそうで、病棟の至るところにおもちゃが置かれ、Playroom があります。年齢層に分けてそれぞれ違った Playroom があり、幼児向けの部屋にはブロックやお絵かき道具、小さい滑り台など。また、小学生くらいの子供には、インターネットができるようにコン

\*大阪薬科大学臨床薬学教室

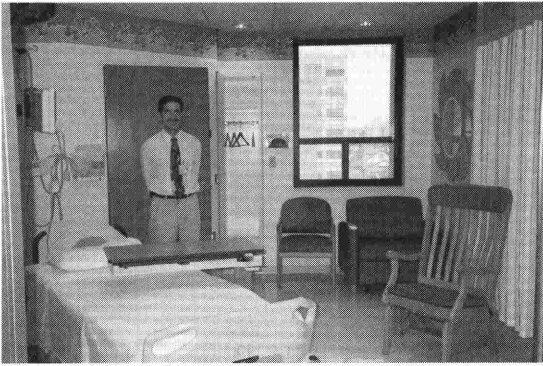


写真1 チルドレンズ・ホスピタルの病室の風景。写真の男性は骨髄移植病棟の薬剤師。

コンピューターが置かれていたり、ビリヤード台があったり、屋上を開放した大きな遊具場もあります。どこのPlayroomもベッドに寝たまま入れるように、大きなつくりになっています。その他、学校へ行けない子供たちのためのクラスルームもあります。

ここで働く人々はみんな明るく気さくで、いろいろな人に会えることができます。看護師や障害をもった人が働いていることもまったく珍しくありません。ドクター達は、患者が子供ばかりとあって、いつもいろいろと思考を凝らしています。例えば聴診器にぬいぐるみのカバーをつけたり、ウサギの耳のようなものをつけたり、人気キャラクターのステッカーをいつもポケットにいれて、いつでも子供に上げられるようにしていたり、ネクタイはカラフルなアニメキャラクターのものをしていたり…。いろいろな人といえば、人種のるつぽアメリカを象徴するかのよう、私が参加した医師の集まりでは、中国人、台湾人、インド人、スペイン人、アルゼンチン人、日本人というように、時にアメリカ人よりも外国人の方が多いという場合があります、いろんな国のなまみの英語が飛び交い、ただでさえ難しい英語も、さらにわからず笑ってしまいます。

あまりにも人々が気さく過ぎて、ちょっと照れくさい思いをしたことがあります。神経科の回診の見学をはじめた直後は、まだ英語もつたなく、右も左もわかりませんでした。面倒をよく見てくれたフェローの方がいました。ちょうどその日は私の誕生日だったので、彼にその話をすると、いきなり‘Happy Birthday!! What can I do for you!!

?’と大きな声でお祝いしてくれるとともに、両手を大きく広げて何かを待っているようなポーズをするのです。そのとき私はわけがわからず、‘何もありません’と言うつもりで、‘ナ、ナッシング…’と返すのが精一杯でした。あとで考えてみれば、あの時私は‘サンキュー!!’と大声で返答してハグをするべきだったようです。公衆の面前で、彼は広げてしまった両手をやりどころなく収めることになってしまって、私は気恥ずかしくてしばし直立不動でした。

薬剤師の仕事振りを拝見させていただいたことです。タワーと呼ばれる、緊急の患者や重度の患者を扱う病棟では、それぞれのフロアごとに薬剤師が一人専属で患者の薬剤管理をしています。例えば、骨髄移植病棟。多いときで20人くらいの患者を一度に管理するそうですが、私が訪れたときは6人の子供がいました。病棟では毎朝グループ回診を行っています。看護婦、栄養士、医師、薬剤師、インターン等に加えて、患者の保護者も加わり、総勢10人程度になります。最近この病院では、保護者の治療参加が積極的に認められてきていて、回診に保護者が参加していました。ここで、患者の経過やこれからの診療方針を話し合います。特に骨髄移植の患者は、術前術後の入院期間が長期に渡るため、保護者も積極的に治療に参加し、また、個人でも骨髄移植に関してずいぶん勉強されるようで、医師のチャートよりも分厚いファイルを持っている保護者の方もいらっしゃいました。ですが、この例は特別です。一般内科などの病棟では、保護者が診療方針の決定に参加するという事は見られませんでした。医師にお聞きしたところ、保護者の意見が反映されるという点では大いに意義があるが、必ずしも保護者の意見を100%受け入れることができないときもあり、また、医師の意向が保護者になかなかわかってもらえない時もあるなど、保護者の治療方針の決定への参加は、善かれ悪かれそうです。

いろいろな病棟を回って思ったのですが、アメリカ人は医師と患者のコミュニケーションがまったく堅苦しくなく、とても砕けています。最初に握手とチームメンバーの紹介から始まって、世間話などをします。ソファに座ることもあるし、時にはスナック片手に話すこともしばしばです。そして一人に掛ける時間が長いのです。最低でも

20分、長くて40分ほど話を続けます。それからチャートの記入に時間をかけ、すべての患者を診終わるまでに、日もとっくに暮れてしまっています。

時には、患者の母親が女子高生というときもあります。てんかん薬は胎児に悪影響を与えるということで知られています。ある日、てんかん発作で運び込まれた女性は、16歳。小さな赤ん坊を連れてくる彼女は二人目を妊娠していることが発覚し、そのとき医師団からはため息がもれていました。また、違う患者で、小学校を卒業する女の子が退院することになり、退院後のための服薬説明をしたときには、てんかん薬と避妊薬では相互作用が起きる可能性があるから、キチッと薬剤師に相談するように、と、医師が保護者を交えて説明するのです。驚くべきことに、多くの高校生が避妊薬を常用しているのです。いろいろな意味で、日本では考えられないような光景が、本当にたくさん見られます。

さて、私の私生活の話です。私は以前からホームステイを希望していましたので、渡米前にいろいろ手を尽くしました。偶然にも、私の出身地である岐阜市とシンシナティ市は姉妹都市であったため、姉妹都市委員会の方にお世話になり、現在一緒に暮らしている、素敵なホストファミリーに出会うことができました。キャリアウーマンのヘレンと、冗談交じりの日本語が上手なスティーブです。私の両親と同年代の夫婦で、本当に親代わりの方・・といたいところですが、いつもひょうきんでジョークばかりを言っているの、年齢よりも若いなあ、と感じずにはられません。彼らは大の親日家で、おかげで私はホームシックにならずに済みました。毎日、日本食を食べることができるし、自宅の地下を改造した大きな浴槽つきの日本風呂も利用できます。これまでに何人も日本人留学生を受け入れており、長くて5年間一緒に暮らした生徒もいるそうです。15年来、箸をつかってご飯を食べ、また、日本中を旅行するのが趣味の一つで、私よりも地理や歴史、文化にも詳しいのです。恥ずかしながら、彼らから日本について教わる機会が多くあります。

彼らの趣味は、浮世絵や着物だけにとどまりません。ヘレンは、数年前に結成されたシンシナティ和太鼓グループのメンバーで、周辺のイベントや

博物館から招待されては、和太鼓をパフォーマンスするという本格的な親日家なのです。アメリカ人の和太鼓演奏を、時には日本人の前で演奏するときもあります。日本人に外国人が日本文化を教えているという光景は、不思議な気持ちにさせられます。JACLというグループに招待されて演奏することが年に何回かあります。この集まりは、Japanese American Citizen's League というもので、日本人、日系人の集まりです。戦前からアメリカに住んでいた日本人たちは戦争開始とともに、財産、土地すべてをアメリカ政府に奪われ、捕らわれの身となり各地の米軍キャンプを転々と移動させられました。戦争終了とともに開放された彼らは、この経験を忘れまいとこのJACLを設立したそうです。彼らのほとんどは50歳以上の高齢です。ある日、和太鼓教室を開いて、日系アメリカ人の子供たちに教えていました。ヘレンたちが「ドン、ドン、ドンドコドン・・」と、口で太鼓の調子を教えていました。傍らに、老人のご夫妻がいすに腰掛けてその風景を眺めていました。彼らもJACLのメンバーで見かけは日本人です。そこで彼らに付き添っていた若いアメリカ人の男性に、その老婦人が聞くのです、「What is ドン？」そしてアメリカ人男性が「ドンっていうのは、太鼓をたたいたときの音を表現しているんだよ」と質問に答えていました。私はこの風景を見たとき衝撃を受けました。ドンという表現が理解できないのを驚くとともに、私の固定観念として、日本人のだけれど、その文化をいつまでも恋しく思っているものだと考えていたからです。この考えは正しいとはいえないようです。実際、病院でも日本人の国籍をもち、日本人の両親をもつアルゼンチン人と話した時も、まったく日本について興味も知識もないことに驚かされたことがあります。日本という文化を軽んじがちだった私ですが、ホストファミリーのおかげで、日本文化を楽しむアメリカの人々と出会って、それを考え直すよい機会にめぐり合うことができました。

取り留めのない話となりましたが、この留学生生活を通していろいろな体験をすることができ、貴重な1年間が過ごせてうれしく思っています。最後になりましたが、この留学の機会を与えてくださった、大阪薬科大学の田中一彦教授、CHMCのDr. Walson, Dr. Vinksに深く感謝致します。